

アンケートの結果においては、特に目だった大きな変化はなかった。

〔考 察〕

一つの試みとして、レクリエーションを実施した事は、それなりの意味があったと思われる。屋外レクリエーションについては、今後輸送車を利用した院外レクリエーションの回数を検討する必要がある。

これは、病院内の社会だけでなく、一般社会とのつながりを持つ意味において、必要かと思う。介助者の問題では、他部門への積極的な働きかけをし、又家族の参加を呼びかけると共に、地域ボランティアの協力を得るように、持って行きたい。

全体的にみて、レクリエーション実施前に比べ、患者相互のコミュニケーションが深まり、集団生活に潤いが出て来たように思われる。

今後も、病棟レクリエーションを続けて行き、入院生活が、少しでも有意義なものに出来るよう援助して行きたい。

4. 筋ジス患者自動車運転免許取得後の追跡調査

国立療養所箱根病院

山 口 龍 子	保 坂 ス ミ
山 口 桂 子	増 子 ハ ル
岩 本 フサエ	村 上 英 子
御 嶽 延 代	綿 貫 八 重
長 堂 和 江	若 松 淳 子
森 田 雅 子	小 川 あや子

リハビリを目的として、免許取得経過を観察した一患者の退院後約一年間の運転状況を追跡調査しました。

〔研究目的〕

1. 運転することによる身体面と精神面の変化を知る。
2. 免許取得後の生活行動範囲を知る。

〔調査方法〕

毎月一回運転と疲労に関するアンケートと、電話、三カ月ごとADLと行動範囲について文通

面接は三回行なった。

〔経 過〕

A D Lは、退院時独自可能で、経過中著明な変化は見られないが、次第に運転中に肩の痛み、下肢倦怠感を訴え、病状は緩満でありながらも進行しているようである。

乗車時間は、平均30分から60分位で、目的は主に買物又は、ドライブなどで、遠出はしてないようです。免許取得前は、数えるほどしかなかった外出が多くなり、生活全体に変化を来たしたと思われる。

精神面では、20才の年令的情緒不安定から、家族関係共に、人との接触など逃避の傾向が見られる。援助として、友の会、筋ジス協会などへの参加を積極的に働きかけて行きたい。

短期間の調査で、全体的に目立った変化は見られなかったが、進行に伴う変形及び筋力低下は明らかであり、自宅療養又は入院生活を送らなければならない前に、可能な限りの生活が出来るための運転。つまり、免許取得は意義あったと思う。

本患者は、運転適性に欠ける時点で、免許返上を自覚しているが、その際患者自身どう対処して行くか、又自動車運転することが、筋ジス患者に与える影響を見て行きたいと思う。

5. 進行性筋ジストロフィーの思春期、青年期患者とその生活 (特に作業療法棟のかかわりについて)

国立療養所西別府病院

石川 早苗 田北 多紀代

小畑 千代子

〔目 的〕

作業療法棟設立を機会に、日常生活の一部として、より有意義な病院生活が送れるような援助をする為に以下の方法により実施したのでその結果について報告する。

〔対象及び方法〕

当院筋ジス患者は、71名で卒業生13名、高等部3、2、1年の19名を対象とした。方法は、1. 患者の病院生活に対するアンケートによる意識調査と個人面接。2. プロセスレコードによる患者の社会性や日常生活の観察。以上の結果をもとに看護婦側からの日常生活の援助について検討した。

↓ **検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用 ↓
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

リハビリを目的として、免許取得経過を観察した一患者の退院後約一年間の
運転状況を追跡調査しました。